

ドイツ国状学と官庁統計

浦 田 昌 計

は し が き

本稿の課題は、ドイツ国状学派における統計数字にたいする認識の形成過程とその特徴を、その若干の代表者の所説を通して追跡してみることにあ
る。統計学が何らかの意味において統計数字——ここでは、社会的集団現象
の過程の組織的観察結果としての数字を意味するものとする——を問題にす
る学問であるとするならば、ドイツ国状学派の統計学の形成にはたした役割
を問うとき、この統計数字に対する認識の形成とその特徴が明らかでなけれ
ばならない。その場合、一方で、彼等の国状把握乃至記述における社会の量
的認識の評価と位置づけ方が問題であるが、他方では、この量的認識の現実
的な基礎としての統計数字の獲得、統計調査にたいする認識が問われねばな
らないであろう。もちろん、統計調査（その主体が官庁統計であることはい
うまでもない）自体が歴史的産物であり、ドイツ国状学派の支配していた時
代に今日のような統計調査が確立されていると考えてはならない。したがっ
て、上記の問題は当然に、当時の統計調査そのものの発展過程を考慮にいれ
つつ、検討されねばならないであろう。

周知のごとく、統計学史の通説としては、ドイツ国状学派の方法は一般に
非数量的であり、その展開の方向は官庁統計とは原理的に相異なるものであ
り、⁽¹⁾官庁統計にたいする認識は消極的ないしむしろ否定的であったと、⁽²⁾支配
的には考えられている。しかし、私がすでに他の論文である程度紹介したよ

(1) たとえば、足利末男訳ヨーン『統計学史』, 36ページ。

(2) Ch. Lorenz, "Werdegang und gegenwärtiger Stand der statistischen Hochschulunterrichts unter besonderer Würdigung seines Begründers," *Allgemeines Statistisches Archiv*, Bd. 33. Heft 1, 1949, S. 57.

うに、⁽³⁾Schlözer の段階では、ドイツ国状学派においても官庁統計の意義は基本的には肯定的に評価されており、むしろそれとの対応を統計学の中心におこうとする構想さえみられるに至っている。Schlözer における官庁統計の評価は、多くの学史家も否定しないところである。それでは、Schlözer における官庁統計の評価は、現実の官庁統計の前進のまえでの消極的な対応というべきものであったのだろうか。そして Schlözer が本来の国状学に異質的なものを持ち込んだのであろうか。

本稿はあらためて、Conring の段階までさかのぼって、国状学における量的認識の位置づけ、とくに官庁統計との対応について考えてみたいと思う。⁽⁴⁾結論的にいえば、私は、ドイツ国状学が、当時の官庁統計と無縁の存在であったのではなくて、むしろ当時の「官庁統計」の存在形態に一定の対応関係をもち、それを学問的に意義づける性格をもっていたことを見落してはならぬと考える。ここで私が「官庁統計」と括弧をつけたのは、それが直ちに今日の官庁統計——むしろ Mayr のいう「悉皆大量観察」というべきだが——を意味するものではなく、より広義の官庁的調査を含めて考えているからである（しかし以下においては、この括弧は省略する）。

なおここでは、ドイツ国状学のうち、いわゆるドイツ大学統計学者 Conring, Achenwall, Schlözer にはほぼ限定して考察した。しかし、いわゆる「比較統計学」や「表派統計学」も基本的には国状学に属するものであり、国状学派内での一定の対抗関係は本稿の主題にも無関係ではありえないが、ここでは、より官庁統計から遠いと考えられている「大学統計学」の代表をとり

(3) 「A. L. von Schlözer の統計思想」、『岡山大学経済学会雑誌』第3巻第1号。

(4) ドイツ国状学にかんするこれまでの私の研究でも、この点はある程度ふれてきたので、個別の所説については、(3)にあげたもののほか、「アッヘンワールの政治算術観」（『統計学』第7号）；「コンリングの国状学について」（『統計学』第10号）；「アッヘンワールの経済思想と経済統計」（『岡山大学法経学会雑誌』第46号）；「Th. Hermann の統計思想——その統計批判論を中心として」（『岡山大学経済学会雑誌』第3巻3・4合併号）等を参照されたい。

あげることで満足せねばならなかった。この点の補足は他日に期したい。さらにまた官庁統計の歴史については、私の知識は、一部の統計史家の所説が出るものではないし、それについても見落しているものが多いので、多くの独断や推測を含むものである。したがって、本稿の結論は、なお仮説的な結論の域を多く出ないものである。

1

国状学の意味での国家記述は、Hermann Conring (1606—1681) 以前に多くの先駆があり、Conring 自身それを Aristoteles までさかのぼりうると考えている。しかし、Conring がそれをはじめてドイツの大学の講義にとりあげただけでなく、また国状学の学問的規定にかかわる説明を詳細に与えたという点では、彼を創始期の国状学の代表者とみなしてよいであろう。

この Conring の国状学——*notitia rerum publicarum*——は、個々の国家の具体的状態についての政治的な包括的な認識であって、その対象は国家としてみた社会のいわゆる実質的な要素（人と物）だけでなく形式的な要素（つまり国家の制度や行政など）の状態を国家の福祉という観点から明らかにしようとするものである。従って、そこで取上げられる知識はもともと対象の数量的側面に限定されるようなものではなかった。しかし、Conring も国家としてとらえた社会の量的側面の知識を無視したわけではなく、彼のいう質料因（人間とその財産）の観察においては、それらを量と質の両面から把握することを一貫して重視していることを見落してはならない。とりわけ国家の人間について、Conring はその量的観察の意味と取り扱い方についてかなり詳しく一般的に論じている。⁽⁵⁾

(5) Hermann Conring, “Exercitatio Historico- Politica de Notitia singularis alicujus Reipublicae”, *Hermannii Conringii Operum* (J. W. Goebel 編), tomus IV, pp. 1—43. これは講義録である。なお人口の量的観察に関する部分は、水野有庸訳、コンリング『個々の国家を対象とする知識について』、『統計学』第10—14号（第Ⅱ章§18まで）、の第14号の部分に訳出されている。

ここで、Conring の所説をやや詳しく述べてみると、人間がまず量について、ついで質について考察されるべきである。その量には連続量と不連続量が区別される。この「連続量」とは、ここでは人間の身長のごとく、単位の量的属性であり、不連続量とは単位の大きさ、数である。注意すべきは、Conring は連続量についてもそれを国民の全体の特徴として、強いていえば集団的特性として捉えようとしていることであるが、この連続量は、不連続量（数）に比べると国家公共の問題に資するところは少ない。但し、特殊な観点のもとでは、この連続量を考察しておくことは、国家の完全な認識という目的に資することになる（たとえば、兵士の戦闘力をみるようなばあいの身長）。これに比べて市民（cives）の数を知っておくことは、それよりも遙かに重要である。その理由は、この場合、「数は、ただ身体だけでなく、同様に精神をも、そして正にそれぞれの人間全体を一緒につかむ（comprehendere）から」である。このことの意味は、われわれの言葉でいえば、市民の数が自然量ではなくて、社会的な量であるということであろう。

この社会的量としての人間の数を、Conring は、まず、市民、寄留者、外国人を区別しない総人口と市民の数（国民）とにわけて考えることの必要性から出発しつつ、それぞれの場合の意味を検討している。寄留者や外国人が考慮に入れられねばならぬのは、たとえば商業都市の場合であり、その場合には、さらに、これら人口の職業別のグループの数が重要になる。外国人の数はまた国の安全という観点からも重要である。

しかし人間の考察の中心は「市民（国民）」の認識である。「市民のどんな個々の組（classes）についても、その数を知っておくことは、骨折り甲斐がある」として、ここでも市民の群別の多様な観点が示されている。すなわち、性別、年齢別のほかに、高位高官と一般市民、善良な組と悪人の組、聖職者と俗人、貴族と賤しい者、富者と貧者、戦士あるいは兵役に適した者

（6）人間集団の量的属性の分布についての言及は、この身長为例が唯一であり、年齢の分布は性別と結びつけて、質的属性として扱われている。

と戦争に向かない者の区分、職人—およびその種別—、農民、商人の群、識者と未熟者、教育を受けた者と受けない者の区分があげられている。Conring はこれらの様々な群別の観点を列記しているだけであるが、彼の政治的観点がほぼ察しられるであろう。

Conring は、また人間の数を、単に絶対量としてでなく、国家の目的（ないしは国家の福祉）との相対的な関係から考察すべきことをのべ、人口の過少、過大という観点を提出している。この規定は、指標としてははなはだあいまいであるが、具体的な一つの尺度として国土にたいする人口（人口密度）が考慮され、⁽⁷⁾ 国別比較に利用されていることは事実である。

Conring は、質料因の一つとしての財（bona）の考察においても、その量——とりわけ財の種類別の——の考察の必要をあげ、またその相対的な評価——過剰、不足、十分——に言及している。そこではなお経済的観点からする統一的な把握・分析の視点が稀薄であるといわざるをえないとはいえ、土地とその自然的属性、家畜、農作物、林産物、鉱物、加工品が、それぞれ、量・質・そしてまた政治的（軍事的、財政的および経済的）効用と共に考察されるべきことが論じられている。⁽⁸⁾

ところで、以上の叙述からも察しられるように、Conring にあっては、量の知識は、質的知識を伴わなければならないものとして考えられている。むしろ、Conring は人間に関する質の知識は量の知識に比べて「役立ちならびに巾広さにおいてきわめてはるかに優る」と考え、量の知識は「有用」だが、質の知識は「必要」だと述べている。これについて Conring が与えている理由は、(1)「〔人間の〕質は国家のあらゆるものに非常に多くの作用を及ぼすが、しかしその量は〔ことに連続量は〕わずかのものにある作用を及ぼす」にすぎぬということ、(2)「数がどんなことを惹起しても、それらは、

(7) Conring の人口統計論については、R. Zehrfeld, *Hermann Conrings Staatenkunde*, 1926, に詳細な研究がある。

(8) Conring, 前掲講義録, Cap. II. §§33—50, 前掲全集 tom. IV, pp.17—24. とくに、量的把握にかんしては§34, 36—38, 42, 45, 47, 48をみよ。

主として質から生じる」ということである。ここで Conring が人間の質と
 っているのは、具体的には政治的観点からみた人間の肉体的及び精神的な
 素質—— Conring は後者が再び、自然的条件と社会生活、訓練等によって
 形成されることを認め、その考察の必要をのべているのだが——のことであ
 る。ともあれ、Conring が量の知識を重視しつつも、量とくに数の背後にあ
 る異質性という点から、量的観察に一定の限界づけを与えていることは明瞭
 であり、この点は国状学において、それぞれの段階で差はあれ、一貫してい
 る。しかしながら、このことから、Conring が社会の量的観察に否定的であ
 ったということにはならない。むしろ、彼が人口や物の分類や相対的な考察
 を重視していることと合わせて考えれば、Conring は、質料因についての量
 的観察の必要性を前提にして、その位置づけ方を論じたものと考えられるの
 である。

Conring は上記の意味で社会的な量的観察の有用性を認めたとしても、彼
 には、このような量的観察が何によって可能であるかについて、即ち統計数
 の獲得について、特別な言及が見当たらない。Conring は、国家の知識の認識
 方法について特別に論及し⁽⁹⁾、国状学派の「資料論」ひいては「資料批判」論
 の先駆をなしたのであるから、このことは確かに問題であろう。そのさい、
 Conring も、人口数や生産物の数量が政府の力なしに得られるとはおそらく
 考えなかったはずである。Zehrfeld はこの点について、(1) Conring が、国
 力の測定はまさに国家の仕事であると考えたこと、(2) そして当時の一般的
 見解として、人口数の調査方法が重大な職務上の機密と考えられており、
 Conring が故意にこれから遠ざかったとしている⁽¹⁰⁾。Zehrfeld の見解はたしか
 に重要な側面の指摘である。しかし、はたしてそれだけであろうか。私には
 さらに特別な調査としての「統計調査」にたいする認識のあり方に一つの理
 由があるように思われる。そのことに立入るまえに、つぎに、Seckendorff

(9) Conring, 同上, Cap. VI, pp. 42—43. また, Examen Rerumpublicarum totius orbis, Prooemium, 前掲全集, tom. IV, pp. 49—57を参照。

(10) Zehrfeld, 前掲書, SS. 114—5。

の「ドイツ領邦国家」についてふれておきたい。

2

Veit von Seckendorff (1626—92) は、必ずしもドイツ国状学（とくに大学統計学）の主要人物とはみなされていないが、それは Seckendorff が大学での講義をしなかったこと、そして彼の「ドイツ領邦国家論」⁽¹¹⁾が、国状学と交わる要素を多分にもちながらも、そこで述べられたものが、特定国家の記述そのものではなく、ドイツの諸領邦が「法律上および尊敬すべき習慣上、通例いかなる状態にあり、いかに統治されているか……」についての簡単な基本的叙述」という表題にもみられるように、行政技術便覧というべき性格をもっているからである。しかし John は「『国土および侯国の一般的なそして明瞭な、しかも外的性質の記述』のドイツの最初の試み」であり、国状学の体系化の「端緒を開いた」と述べているように、⁽¹²⁾Seckendorff は国状学の広義の一環としての意義をもっていたと考えるべきであろう。ただし、ここでは Seckendorff を国状学の歴史でどう評価するかということよりも Seckendorff の著書の Biechlingen の校訂本にみられる数量的記述の様式、そしてその資料源泉の指摘を Conring との関連で考えてみたいのである。（この A. S. Biechlingen の校訂本が原著にかなりの手を加えていることは、この版が Biechlingen によって「熱心に改訂され、かつそれに関係ある銅版画、要約および索引とともに、有用な注解を附して」という扉の文句からもうかがわれるので、次にあげる表および注が原著者の手になるものか否かは疑問の余地が残る。）

Seckendorff の「ドイツ領邦国家」において、その第 1 部——ある国または領地の全体としての、またその明白な外的性質による、記述について——

(11) Seckendorff, *Deutscher Fürsten-Staat*, 1656. 但し、ここで利用したのは Seckendorff の死後 A. S. Biechlingen によって校訂出版された 1720 年の版である。残念ながらより以前の版を入手する余裕がなかった。

(12) ヨーン、前掲訳書、54—55 ページ。

は、「ただ各領邦の具体的な記述がそれにしたがっておこなわれうるような危険のないモデルあるいは様式 (Art) 」だけを示しているにすぎないが、その第2章には、次のような領邦の総地誌 (Generallandes-beschreibung) のための表 (第1表) と管区および諸領の特殊表のモデル (第2表) が掲げられている (前者は後者から作成されるべきものである)。また第4章——国の人間と住民、およびその特性について——では、諸身分についての記述の一部として、市民と農民とにかんしては、「たんに……人間の数が、炉の数、検閲名簿 (Muster-rolle) および主任司祭のもつ人口記録 (Seelenregister) から、同じように、認めうるだけでなく、またさらにどんな手工業者、商人、職人、およびただ財産によって生計をたてているのではない旅館主 (Hauswirt)、農民、および日傭人が、各都市および管区で見出されるかを識ることが有用だ」 (S. 27) として、そのための表のモデル (第3表) をあげ、さらにこの表の注で、手工業者の種類が記入されるのが常であること

第1表 国あるいは領邦の管区 (Ämter) についての表

Ämter への所属 右のような	Amt. N.	Amt. N.	Amt. N.	Amt. N.	Amt. N.
代官管区、裁判管区あるいは下級 Ämter	N.	N.	N.	N.	N.
都 市	N.	N.	N.	N.	N.
地 点 あ る い は 市 場	N.	N.	N.	N.	N.
村	N.	N.	N.	N.	N.
部 落	N.	N.	N.	N.	N.
個 々 の 屋 敷	N.	N.	N.	N.	N.
山	N.	N.	N.	N.	N.
宮 林 と 森 林	N.	N.	N.	N.	N.
川	N.	N.	N.	N.	N.
海	N.	N.	N.	N.	N.

(注) この表の N. のところには「名前または、枠がせますぎれば、数を書くことができる。」Seckendorff, 前掲書, S. 15.

を述べ、これらの対象が非常に変動しやすく、そのため、管区記録 (Amtsbeschreibung) は毎年あるいは二年毎に増減が検査されねばならぬこと、を付記している (S. 28)。さらにまた、第3章——土地の特性と豊度について——では、「人間の生活手段および給養手段、各種の穀物、酒、家畜、猟獣、魚、伐木のうち、国のあれこれの地方で、もっともよく、ないししばしば所有するもの、反対に不足し、他の地方から供給されねばならないもの、が各管区の特記述から、簡単にそして総括的に報告されなければならぬし、また報告されうる」(S. 18) とし、ここでとりあげねばならぬと述べられている(それらの表の見本は示されていない)。

第2表 管区あるいは領地N. N.の、諸管区、領地、都市あるいは村の所属物にかんする表

その下につぎつものがある	都市 N	町 N	村 N	部落 N
炉	N.	N.	N.	N.
領主屋敷	N.	N.	N.	N.
教区教会その他の教会	N.	N.	N.	N.
修道院あるいは学院	N.	N.	N.	N.
学校	N.	N.	N.	N.
病院	N.	N.	N.	N.
疫病院等	N.	N.	N.	N.
市役所	N.	N.	N.	N.
村役場、ギルド会館、または商店	N.	N.	N.	N.
貴族の屋敷	N.	N.	N.	N.
免税農地	N.	N.	N.	N.
醸造所	N.	N.	N.	N.
製粉所	N.	N.	N.	N.
その他の水車	N.	N.	N.	N.

ところで、Seckendorff の書物にみられるのは、領邦全体の記述のための表式であるが、それらは同時に各行政区が備え、そして報告すべき表式でもあったと見做しうる。そのうち「市民および農民」にかんする第3表はすでに「集計表」の形式を備えたものであり、一種の表式調査が想定されているといえよう。しかし、同時に第1表、第2表は、実は元来目録表として出来ていることに注意すべきである。目録の一部分が、すなわち、「枠がせまければ数を書いてもよい」(S. 13)という形で次第に統計表式化したことが示されているといえよう。

われわれがこのことを重視するのは、後述のごとく、当時たしかに絶対主義化しつつあるドイツの領邦国家の一部や、フランス等の一部の国で、全国的な統計数字が集められつつあったとはいえ、その調査は、もちろん現代的なセンサスの形でおこなわれたのではなく、その多くは、地方に対する検査の一環として、また地方機関からの行政報告の一環として、地域の状況を示す目録表(古い意味の土地台帳から出たもの)、あるいは行政記録の摘要が求

第3表 「市民および農民の表」*

管 区 名	N.	N.	N.	N.
炉	72	15	68	56
住 民 (以下の総数)	69	15	68	48
商 人	1	—	2	—
手 工 業 者	9	1	5	7
技 術 職 人	時 計 製造人 1	—	オルガン 製造人 1	—
旅 館 主	2	—	1	—
農 民	48	12	50	30
日 傭 及 ブ ド ウ 園 夫	8	2	9	11

* この表で注意すべきは、炉数と住民数が一緒に掲げられていること、住民数はその内訳が示すように、一定の階級の——貴族や外国人をのぞく——臣民であること、しかも家長(Wirte)だけで、家族を含まないこと、等である。

められ、それが中央官庁で部分的に集計されることから出発していると思われるからである。それを意識化して 数的集計に 好都合なように、統一「表式」化していったものがいわゆる「表式調査」にはかならない。しかし「表式調査」も初期には一般的な地方の行政報告と十分には分化されずに結びついていたと思われるのである。節をあらためて、当時の統計調査の特徴をみることにしよう。

3

Conring や Seckendorff の時代の官庁統計の状態を詳細に明らかにすることは困難なことであるが、A. Günther は、（ドイツにおける）「統計作業 (statistische Kunst) の開始は、ほとんど共通にオスナブリュックの傭和 (1648年) とともににはじまる」と述べている。⁽¹³⁾ ドイツの領邦君主たちは、領邦内の諸身分の力をおさえつつ領邦の統一、自己の権力の拡大を図り、プロイセンやオーストリアではやがてフランス等の絶対主義をまねた領邦絶対主義へと成長していくが、この過程で、領邦君主はまず何よりも自己の財政的、軍事的目的のためにその直接的な基礎資料を必要とすると同時に、またこの基盤の確保をめざす治安の維持、人口の増殖、「農民保護」、産業育成等の諸政策のための行政資料を広汎に必要とするにいたる。しかし Conring や Seckendorff が仕事をした60年代前後には、まだそれらの仕事は断片的であり、非系統的であった。

Zahn は、プロイセンの人口静態調査の開始として——1486年までさかのぼりうる若干の調査を別とすれば——1654年のマルク・ブランデンブルグのすべての郡 (Kreis) における現存の臣民の表 (Verzeichnis) の作成をあげている。これは都市の租税記録 (Schoßregister) および農村の地方租税記録

(13) A. Günther, "Geschichte der deutschen Statistik", *Die Statistik in Deutschland in ihrem heutigen Stand*, herausgegeben von F. Zahn, Bd. 1, 1911, S. 11.

(*landschaftliches Steuerregister*) にもとづくものであった。⁽¹⁴⁾同じ頃、家畜および播種の表も作成される。ところで A. Günther は、これに先立ってブランデンブルグ選帝侯は、官吏および牧師の手による「聖職身分、生業身分、軍人身分の調査と保存」——大規模なとくに人口統計的な調査——についての枢密院の一構成員の提案(1644)を、1652/53年にとりあげたが、「計画は、おそらく当時の統計事業と財政政策的事業との密接な関係のもとでは、正当にも、租税的な不利をおそれた騎士階級の反対にあって挫折した」ことを述べている。⁽¹⁵⁾この段階のプロイセンの人口調査そのものがこのようにほとんど租税統計的な色彩をもつものであり、それを領邦全体に実施するにはなお領主層の強い抵抗を受けたのである。1650年には御料地の収入の統計表が命じられている。これらは三十年戦争によって占有状態、租税義務等にかんする台帳、特に管区記録(*Amtsbeschreibung*)がほとんどなくなったことと関連している。

ところで、ドイツの領邦国家の政治のいわば模範となったフランスにおいても、有名な17世紀初頭の大蔵大臣 Sully の「統計的な」事業も全く王権の財政的基礎の再建をめざして行なわれたものとみることができる。⁽¹⁶⁾それにたいして Colbert の1663年からの調査(知事にたいする質問)は、同じく税制的観点を基本としつつもより広汎な行政的観点を含んでおり、「それは行政のすべての部門、各級の官吏と聖職者、商業、マニュファクチャ、そして各県の人民の精神と気質にまで及んだ」ものであった。⁽¹⁶⁾

Zahn によれば、プロイセンで「租税統計的調査から本来的行政統計へ」と移ったのは、1719年の「都市の状態の歴史表」、1722年の「農村の詳細に

(14) F. Zahn, "Statistik," *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl., Bd. 7, 1926, S. 902.

(15) Günther, 前掲書, S. 13.

(16) F. Faure, "The development and progress of statistics in France," *The history of statistics*, collected and edited by John Koren, 1918. pp. 244—249.

「(17) についての基本表」であったとされる。ところで、この後者についての政令(1722年10月22日付)は H. Klinckmüller の紹介によれば次のように述べている。⁽¹⁸⁾

「(前略) わが General-Kriegs-Kommissariat のもとで他の諸県と同じく Kurmark のすべての郡についての一つの明確な報告をもつことが必要と考える。その報告から、何時でも、それらの〔郡の〕固有の細部を、すなわち、その住民とその耕地面積、ならびに各村からの公租への負担が見出されうだろう。そこでわれわれは、その目的のために、われわれが要求する情報がそれによって秩序よく記載され得、また記載されるべき一定の図式と表を企画させた。……それらを、そこに見出される項目に従って、土地台帳、附属書類 (Anlage) およびその他の汝等の地方記録所 (Landes Registraturen) のもとにある情報から、……できるだけ早くまた必ず記入し、整理しなければならず、またわが General-Kriegs-Kommissariat へ、署名を付して送付しなければならない……。」

この表の「表式」は、25項目からなり、臣民の数、内訳、1.農民、2.コセーテン、3.ブドナー、4.漁夫、5.粉屋、6.鍛冶屋、7.麻織人、8.仕立屋、9.大工、10.車大工、11.桶屋、12.小作人 (Häuslinge)、13.羊飼、14.牧夫、15.妻、16.息子、17.娘、18.10才以下の息子、19.10才以下の娘、20.下男、21.下女、22.以上合計、23.フーフェの数、24.地租、25.騎兵税、であった。都市に関する歴史表も、基本的には同じ性格だが、ここでは人口の職業別区分が多様化すると共に、租税、家屋、消費、公共施設等の事細かな項目があらわれている。

この18世紀になって確立したプロイセン絶対主義のもとでの「歴史表」——形式的には表式調査の形をとる——にみられるのは、それが、(1)たしかに数字としての全国的集計が一方で志向されてはいるが、Klinckmüller も

(17) F. Zahn, 前掲書, S. 902.

(18) H. Klinckmüller, *Die amtliche Statistik Preußens im vorigen Jahrhundert*, 1880. SS. 14—15. これは、Kurmark での調査への令状であるが、他の諸県にも発せられたのである。これは毎年2回送付することが要求された。

強調するように、なお地方別目録表の性格、そしてまた地誌的色彩を強く持っており、そういう形での国家の状態の記述が問題であったということ、⁽¹⁹⁾そして郡の報告は、たしかに基本部分が表式の形で示され、「大部分は数字で答えられた」ものであったが、同じく、Klinckmüllerの紹介している1768年のフリードリヒ二世のもとでの「都市の状態の表」の遡大な調査項目が示しているように、それは各都市の人口、経済、財政を中心とした詳細な行政的報告の要綱であって、その中には各種の制度的事項や経済地理的事項をも含んだものであった。⁽²⁰⁾

当時の「統計調査」のもう一つの流れとして、教会記録にもとづく、人口動態の統計の蒐集が、プロイセンにおいても、1683年に F. Wilhelm によってベルリンにたいして命じられ、1688年からは、ブランデンブルグ・プロイセンの全域において作成された。この段階では人口動態記録がいかに利用されたかは必ずしも明らかでないが、人口動態の記録は、教会における魂の目録（現在員のリスト）と不可分のものであったこと、そしてまた、人口動態の集計がまさに教区毎に、そして、郡毎におこなわれたことに注意すべきである。プロイセンで人口動態の推計にそれが使用されはじめたのは、Süßmilch 以降だと思われるが、その結果も、先に述べた「歴史表」や、その一部としての「人口表」からの数字のチェックとして使用された。Klinkmüller は、Friedrich II. 自身がそのような比較を試みたことを指摘している。⁽²¹⁾このことは、当時における人口統計の基本が、時に誤解されるように、教会記録にもとづく動態統計の作成と人口推計におかれていたのではなく、後者は、地方官庁からの歴史表、人口表の補完物であったこと、を示すものである。絶対主義政府は、地方官庁にたいして、強圧的な罰則をもって、正確な報告を課したが、それは地方官吏にとって大へんな負担であると同時に

(19) Klinckmüller, 前掲書, S. 1, 9, 53.

(20) 前掲書, SS. 20—26.

(21) 前掲書, SS. 8—13.

に、大衆にとっては、兵役および租税等の恐怖をまきおこし、そのために逃亡が増えるという状態をさえまねいた。教会記録による推計が、ここからおこる不正や不正確な報告にたいするチェックとして用いられた。絶対主義政府の調査の主眼は、Friedrich II. の言葉にもあるように、村々の細部にわたる状態の把握を基本としていた。その上になつての地方単位での集計にもとづいて全国の一覧表が⁽²²⁾つくられたのである。

ところで、以上のような、17・8世紀のプロイセンや革命前フランスの官庁統計の状態をふまえてみると、Seckendorff の上掲書にある「国土の外的記述」の諸項目は——表やモデルでは示されえない諸事項まで含めて——絶対主義段階での官庁統計の性格と表裏していたことが察しられるのである。もちろん18世紀のプロイセンの統計調査は、その調査項目——とくに経済的な事項について——きわめて多様化し複雑化しており、産業政策や人口政策のための細目が附加されている。しかし、それが、土地台帳や地方目録表の延長線上で組立てられた行政調査であったという性格は変らない。その意味で、Seckendorff の記述は、開始しつつある絶対主義の官庁統計調査の形式を一般化し——そこで技術的な面で意図されているのは地方的諸記録の統一化とその全国的な統轄と集計である——、それを国家の政治的行政的知識全体の中に位置づけようとしたものといえる。

さらに、Conring の国状学における質料因の諸指標もまた、それにつながるものであったといっても、そう言いすぎにはならないであろう。——先に述べたように、Conring が、数量的指標の調査法に言及しなかった一つの理由も、Conring にとって、当時の状態からしてそれが一般の行政的文書や官庁記録と特別に異なるものとしては意識されていなかったということに求められるのではないかと思われる。そういう意味で Conring にとって

(22) 統計調査の歴史的諸形態の考察にあたっては、木村太郎「統計生産の歴史的諸形態について」、『蜷川虎三先生古稀記念、現代の経済と統計』所収、によって有益な示唆をうけた。

は、統計数字は、他の多くの情報と等しく、まさに政府ないし政治家が持っており、また持っていなければならない情報なのである。私人としての国状学者は、政治家に接触することによってこの情報を入手し、それを国状学の体系の中で位置づけて、再び将来の政治家、官僚の教育に資するべきであった。その意味では、Conring の国状学の体系は、実は政府自体がその総合的な政策立案のために持っているべき情報の体系化でもあり、その範囲内で必要な統計数字の位置づけも与える意味をもっていたといってもよいのである。

4

すでに若干のべたように、18世紀になって、ドイツの官庁統計は、プロイセンを先頭に絶対主義型の統計調査をますます広汎に押し進めてゆくが、その面でドイツ国状学は十分にこの展開に足並をそろえては前進しえなかった。国状学の意味での統計学の普及に大きな役割をはたした Achenwall は私もすでに述べたように、「土地と人間」という彼の統計学（国状学）の新しい体系のもとで、「一国の力は主としてその富に依存している」という観点にたった国の経済状態の把握において、Conring よりはたしかに前進した指標体系を示し、それに対応する数量的指標の必要性の認識においても進んでいたとはいえ、現実の国状記述においては、ドイツの記述をさけて通らざるをえず——彼はプロイセンとオーストリアの記述を用意したが、それを彼のテキストには含めなかった——、彼もまた政府の統計調査を彼の統計学と結びつけて問題にすることはできなかったのである。⁽²³⁾

このことは、絶対主義国家プロイセンをはじめとする当時のドイツ諸領邦の極端な秘密主義のもとで、小領邦の講壇統計学者にとって実際の官庁統計に接触する機会が原則的には截ちきられていたことが、もっとも大きな理由

(23) Achenwall が「統計調査」を軽視したわけではないことは、拙稿「アッヘンワールの政治算術観」、『統計学』第7号、をみよ。

とみななければならない。⁽²⁴⁾ もちろん、ドイツ国状学が外国の「統計的」記述に精力的であったことは、各国の官庁統計の非公開のもとで、ドイツの官吏志願者にとっては、明らかに無意味ではなかった。その点プロイセンの牧師であった Süßmilch は幾分事情が違っていた。牧師は当時まさに官吏であり、人口動態の記録係であると共に、静態的な人口調査にたいしても一定の役割を負わされていた (Klinckmüller, 前掲書, S. 13)。したがって彼の場合、政府が認める範囲で、政府資料の利用に従事しえたり、またまさにプロイセンの絶対主義政府のために統計調査に協力した。しかしながら、Süßmilch もまた、人口に関する限られた情報の範囲でしか、政府資料を利用することを許されなかったことはいうまでもない。

ドイツ国状学の中で、官庁統計を正面から取りあげたのは、Schlözer であった。それについては私もすでにかなり詳しく論じたところである。Schlözer の積極的な側面は、統計情報の基本的生産者が官吏（政府）であること、私的文筆家としての国状学者は官庁資料の蒐集者（そして利用者）であることを確認し、さらにその上で、統計が何を、いかにして、把握すべきかという統計的技術 (Kunst) を問題にする統計理論を提起することによって、官庁統計と統計学の関係を明確にしようとしたところにある。この場合 Schlözer は、依然として国状学の体系をまもり、統計資料を数的資料に限定することに賛成しないが、彼のいう「基本統計」の部分を中心に、国状記述の中で数的資料が大きな部分を占めることを否定しない。そして Süßmilch の「政治算術」的研究の実証的部分の統計学（国状学）への包摂をも意図した。しかも、Schlözer は、表式調査の形をとった統計調査過程——「表式」と説明書の作成と記入者の能力と忠実さ——に眼を向け、これを「統計の真実性」——「統計批判」と結びつける方向を示唆すると共に、政府における統

(24) フリードリヒ・ウィルヘルム一世の時代のプロイセンの機密主義はとりわけ激しく、「住民表」、「歴史表」の作成自体が中断されたほどである。フリードリヒ二世のばあいも機密主義が本質的に変化したわけではない。

計的情報の公表を強く要求した。

Schlözer のこの前進の背景には、スウェーデンの統計機関の設立とその部分的公表の開始（1762）、彼自身のロシアでの人口統計事業への参加、そして Büsching 等を介してのプロイセンの統計の部分的な非公式の公表⁽²⁵⁾、革命後のフランスの県知事報告の公表（1803）、等が考えられる。要するに彼自身が言うように、「官庁統計」と「講壇統計学」との18世紀末にはじまる結び付きの開始がそれである。

しかしながら、Schlözer におけるこの前進は、ドイツ国状学の内部での進歩であり、これまで述べたことから明らかなように、またそれと異質なものではなかった。Schlözer の統計学の規定は、依然として、“Vires Unitae Agunt” というその公式が示すように、政府の行政的指導に社会的発展の推進力を求める 基本的観点において 国状学の伝統的観念に従っているのである。資料批判（統計批判）の観点から官庁統計の表式とその調査過程に眼をむけた彼の見解の積極的側面は重視すべきであるが、彼がそのさい調査表式の技術的側面と下級官吏の無智と怠慢という点においてのみとらえ、被調査者の問題を抜きにしていることは、彼が念頭にいたものが行政資料にもとづく「表式調査」であったということだけでなく、絶対主義の統計調査の基本をなす点に彼が批判を向けてはいないことを物語る。このようにみてくると Schlözer の統計学も、基本的には、彼の時代の、そしてなお後につづく絶対主義型の官庁統計の指導理論にほかならなかったといわねばならない。そのことは彼の所説の中に新たに展開されるべき要素のあることを否定するものでももちろんないし、官庁統計の公表にたいする彼の要求はその後も長く意味をもちつづけたのではあるが。

(25) Büsching の記述した情報の一部は、非公式の官庁統計である。そして Meitzen は Büsching の統計を官庁統計と呼んでいる。Meitzen, *Geschichte, Theorie und Technik der Statistik*, 1886, S. 10. しかし、Schlözer のばあいもプロイセンの大臣たちから限られた情報をあたえられたと思われる。

結 び

以上においてわれわれはドイツ国状学と当時における官庁統計との接点がある程度たしかめ得たと思う。少くともドイツの国状学が原理上官庁統計と異質的な存在であったわけではなく、絶対主義のもとでの官庁統計と同じ根をもち、そしてそれとの直接、間接の接触のうちで、展開されていることを見出しうるであろう。そうであるからこそ、19世紀初頭から前半にかけての統計学がなお色濃く国状学の性格をもち、そして当時の中央統計官庁が、しばしば国状学的課題領域を広く包んだ「統計—地誌局」の如き形態をとって成立するのである。⁽²⁶⁾

統計の歴史において、統計調査がもともと広義での調査、観察の一部として成立したものであること——「統計的観察」がはじめから独立の存在として形成されたものではないこと——を見落すべきではない。絶対主義の時期の統計調査そのものは、統計と地誌その他との密接な結合をなお強く残しており、国状学はその様な形態での社会の総合的観察を、彼等の国家観、社会観のもとで体系化し、一定の批判的考察の対象としようとしたものといえる。その限りにおいてドイツ国状学も当時の官庁統計の発展に寄与したのであるが、同時に、その伝統的立場の故に、ヨーロッパにおける資本主義的統計調査の本格的成立と定期的公表の開始——それは1830年代以降である——と共に、そしてまた個別社会科学における統計利用の進展とともに、統計の理論としての立場を失ってゆかざるを得なかったのである。

しかしながら、国状学に代って登場する「近代統計理論」（ケトレーの理論）は、国状学からの脱皮にあたりその機械的法則観と数理的統計利用を強調し、「統計理論」上統計観察と爾余の歴史資料、社会観察との結びつきを

(26) ドイツでは Württemberg の統計局が20世紀までこの性格をもっていた。G. v. Mayr, *Statistik und Gesellschaftslehre*, Bd. I. Theoretische Statistik, 2. Aufl. 1914, SS. 301—302. またフランスやスペイン等にも例を見得る。F. Zahn, 前掲論文。

切断し、国状学が持っていた「歴史資料の一つとしての統計資料」という認識までも捨ててしまう。Knies のあの論断（国状学と統計学の切断）を経て形成されるドイツ社会統計学の代表者 G. v. Mayr が、「国家顕著事項の古い統計学が達成したものは、そして今日なお現代の統計学において生きつづけているものは、社会的状態の集團觀察にたいする、確立されたことの秩序だった記述にたいする、ならびに統計学の歴史的要素の発展にたいする、関心の発達である」、「今日の統計学が正当にもその記述的作業および歴史的個別化のこの領域でその義務とするものは、古い国家顕著事項の統計学の遺産である」⁽²⁷⁾と述べているのは、Knies や Wagner の統計学史観にたいする一定の批判の産物であり、国状学派の歴史的意義を認めようとするものである。しかしなお、官庁統計の形成過程との対応の中で国状学派のもっていた「歴史資料の一つとしての統計」という認識、そのうえでの統計資料の真実性と社会の量的認識の意味への問い、という点での国状学の素朴な問題提起は汲み尽されていないように思われる。

(27) Mayr, 前掲書, S. 325.